記者発表（資料配付）				
月/日	担当施設 課名	TEL	発表者名 （担当課長名）	その他配布先
５月28日（月） 14:00	県立考古博物館 埋蔵文化財課	079(437)5589	副館長兼総務部長 木下吉明 （埋蔵文化財課長 中川　渉）	東播磨県民局 中播磨県民センター

前田遺跡（姫路市網干区高田）の発掘調査成果と速報展示について

（主）太子御津線　社会資本整備総合交付金事業に伴って、兵庫県教育委員会は（公財）兵庫県まちづくり技術センターに委託して、前田遺跡（まえだいせき）の発掘調査を行いました。

平成 29 年度の調査の結果、古墳時代の集落跡から特殊な形態の装飾付須恵器が出土しました。

ついては、調査成果を広く県民に公開するため、下記のとおり速報展示を行います。

記

１　日時：平成３０年６月１日(金)～７月３１日（火）

２　場所：兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中１－１－１）
　　メインホール展示ケース（装飾付須恵器展示）
　　ネットワーク広場（写真パネル等）

３　調査成果概要　別紙のとおり

４　問い合わせ先
（公財）兵庫県まちづくり技術センター
　担当　埋蔵文化財調査部次長　甲斐　昭光
　℡０７９（４３７）５５６１（土・日・祝日を除く）
兵庫県立考古博物館
　担当　総務部埋蔵文化財課長　中川　渉
　℡０７９（４３７）５５９５（土・日・祝日を除く）

前田遺跡の発掘調査成果の概要

1　遺　跡　名　前田遺跡（まえだいせき）

2　遺跡の種別　集落跡

3　遺跡の時代　古墳時代・中世

4　所　在　地　姫路市網干区高田

5　調 査 原 因　（主）太子御津線　社会資本整備総合交付金事業

6　調 査 主 体　兵庫県教育委員会

7　調 査 機 関　（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
担当　久保弘幸副課長

8　特 記 事 項

(1)　揖保川東岸の沖積地の調査で古墳時代の集落が見つかった。

(2)　古墳時代中～後期（５世紀後半～６世紀初頭）の遺構が検出され、遺物としては５世紀末頃の井戸から出土した装飾付須恵器が特筆される。

(3)　装飾付須恵器は、壺の肩に５つの子壺を貼り付け、子壺同士を棒状の粘土でつなぐ特異な形態で、国内に類例がない。

(4)　装飾付須恵器は、完形に近い多くの土器や滑石製の玉とともに、井戸を埋めた土から出土したもので、井戸を埋める際の祭祀行為を反映している。

(5)　装飾付須恵器は、地域の首長を葬った古墳から出土することが多いため、前田遺跡が地域の中核的な集落であった可能性が高い。

(6)　調査成果を広く県民に公開するため、６月１日（金）から県立考古博物館で展示します。

前田遺跡出土の装飾付須恵器について

平成29年度に実施した前田遺跡の発掘調査において、古墳時代の井戸より、装飾付須恵器１点を含む祭祀に用いた多くの遺物が出土した。

【要点】

１　出土した装飾付須恵器が、全国でも他に例を見ない特殊な形態であること

壷の肩部に５点の子壷を付けるが、子壷間を棒状の粘土でつなぐという特殊な形態。その意味するところは今後の検討課題だが、６世紀に定型化する以前に生産された装飾付須恵器の貴重な新例といえる。

２　装飾付須恵器が井戸廃絶に伴う祭祀に使われた検出例がきわめて珍しく、この種の土器の用途に新たな知見を加えた

装飾付須恵器は日常生活に使う土器ではなく、祭祀に用いられたもの。兵庫県内で97点が出土しているが、８割以上は古墳に供献されたもので、他に集落跡・窯跡からも見つかっている。本例のように井戸廃絶に伴う祭祀に用いられた事例は兵庫県下では初見であり、全国の事例も少ない。

（参考）

１　装飾付須恵器の出土状況

この土器を出土した井戸は、直径約 1.8m、深さ 1.3m以上を測る。井戸内の上部約 2/3 ほどからは､約50個の完形に近い土器とともに装飾付須恵器が埋め置かれた状態で出土した。滑石製臼玉４点も出土したことから、井戸を廃する際に、以下の手順で丁寧な祭祀が行われたことが復元される。

井戸内には、まず中央に須恵器大甕を据え、その周囲に土師器の壷、甕、高杯、須恵器の無蓋高杯等を配置し、その上に須恵器大甕を取り巻くように土師器の壷、甕、高杯、須恵器の甕、高杯、装飾付須恵器を並べながら、土で埋め戻している。また滑石製臼玉４点は、井戸上部の埋土中より出土した。

井戸廃絶の時期は、出土した須恵器の型式から、５世紀末頃と考えられる。

上述の土器以外に、井戸内からは韓式系土器の破片２点も出土している。

２　装飾付須恵器について

装飾付須恵器は、国内では５世紀代に生産が開始され、６～７世紀にかけての古墳から出土する例がほとんどである。その種類も、壷に小型土器をつけたものや、人物・動物などの小像をつけたものなど多くの種類がある。

今回出土した装飾付須恵器は５世紀末につくられたもので、高さ 13.2㎝、腹部径 15.6㎝を測る。やや扁平な球形の体部をもつ親壷の肩部に、５個の子壷を配し、子壷の腹部の間を棒状の粘土でつないでいる。

親壺は、その形状や模様の付け方から「䟽（はそう）」とよばれる器種に似ているが、通常䟽に見られる腹部の孔がない点が特徴的である。

装飾付須恵器の起源は朝鮮半島にあり、須恵器生産が日本に導入されたのとほぼ同時期に日本でも生産されるようになるが、その生産初期である５世紀代には、多様な形態の装飾付須恵器が工夫された。本遺跡の例も、このような装飾付須恵器生産の初期段階における、多様な形態の一例であった可能性がある。

３　前田遺跡の評価

前田遺跡は、従来奈良時代の遺跡として知られていたが、今回の調査で古墳時代中期の集落の一部を確認することができた。また、装飾付須恵器が出土した集落遺跡はきわめて例が少ないが、県下では松野遺跡（神戸市)、若王子遺跡（尼崎市）があり、いずれも地域の中心的集落として知られているため、本遺跡も同様の性格と想定できる。

今回の調査場所は、遺構の分布密度などから、古墳時代集落の縁辺部にあたるものと考えられるが、今後の調査によって、遺跡の性格をより詳細に検討したい。

■装飾付須恵器の評価に係る学識経験者

氏名：山田邦和（やまだくにかず）
所属：同志社女子大学 現代社会学部 社会システム学科 教授
専攻：考古学・日本史（とくに須恵器生産の研究、平安京・中世京都の都市構造の研究、
天皇陵の研究）
連絡先：090-9697-8052（携帯電話）
FZK06736@nifty.ne.jp（電子メール）

前田遺跡提供写真

調査区全景（南から）

井戸土器出土状況（上層）

井戸土器出土状況（上層近景）

井戸調査風景

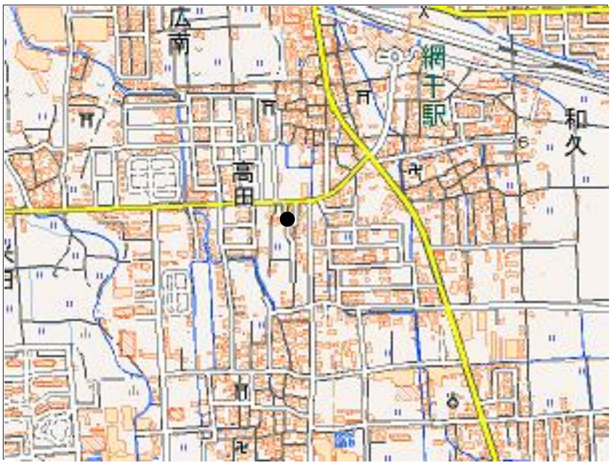
井戸出土装飾付須恵器

遺跡調査番号 2017010

まえだ いせき

□　前田遺跡

所在地　　姫路市網干区高田
事業者名　兵庫県中播磨県民センター
　　　　　姫路土木事務所
事業名　　（主）太子御津線社会資本整備
　　　　　総合交付金事業
担当者　　久保弘幸・新田宏子
種　別　　本発掘調査
期　間　　平成 30 年 1 月 22 日
　　　　　～平成 30 年 3 月 6 日
面　積　　450 ㎡



遺跡の位置（「網干」）

1　調査に至る経過

兵庫県中播磨県民センターは、姫路市網干区高田において（主）太子御津線社会資本整備総合交付金事業として、立体交差によるバイパス道路の整備を行っている。当該事業地では、平成 26 年度に兵庫県教育委員会が行った確認調査（遺跡調査番号：2014016）の結果、遺跡が存在することが明らかとなった。平成 29 年 10 月 4 日付　中播（姫土）第 5184 号　で兵庫県中播磨県民センター長からの依頼を受けた兵庫県教育委員会からの受託により、本発掘調査を実施した。なお前田遺跡については、平成 28 年度にも本発掘調査を実施しており（遺跡調査番号：2016150)、今年度は２回目の本発掘調査となる。

2　調査の概要

調査区は南北に長い道路予定地である。遺構は調査区北半で密度が高く、古墳時代と推定される掘立柱建物跡１棟、竪穴建物跡１棟が検出されたほか、中世と推定される掘立柱建物跡１棟、所属時期不明の畦畔遺構およびこれに付随する耕作溝などが検出された。調査区南半では柱穴が散漫に検出されたほか、古墳時代の井戸１基が検出された。

【古墳時代の遺構】

掘立柱建物は、直径が 60 ㎝前後の不整円形の柱穴から成る。調査区内では南北４間、東西１間分が検出されたが、建物はさらに調査区外西側へ広がるものと思われる。

竪穴建物跡は調査区東壁沿いに位置する。約 1/2 が調査区外東側にあるため、正確な規模は不明であるが、西辺は約４ｍを測る。正方形と推定され、建物内床面からは土師器高杯、甕等が出土している。

井戸は長径が 1.8ｍを測る楕円形の掘方をもち、検出面からの深さは約 1.3ｍを測る。井戸内の上部約 2/3 ほどには、人為的に埋置されたと考えられる多数の土器類が認められ、滑石製臼玉も出土したことから、井戸を廃する際に祭祀が行われたと推定される。

井戸内の土器は、まず大型の須恵器甕を、口縁部を下にして井戸中央に据え、その周囲に土師器壷、甕、高杯、須恵器無蓋高杯等を配置して最下段としている。その上位に須恵器大甕を取り巻くように土師器壷、甕を置き、さらに上位には土師器甕および装飾付須恵器（壷）を置く。最上部には須恵器大甕を覆うように、土師器甕、高杯、須恵器甕、杯、有蓋高杯等を配置する。滑石製臼玉は最上部の埋土中

より４点が出土した。

また井戸最下底からは、上述の土器類とは別に土師器壷・甕各２点が出土した。最下底で出土した土師器壷は、炭素を全面に吸着させ、器表にヘラミガキを施した特異なものである。

さらに、井戸埋土からは、韓式系土器の小片２点が出土している。

上述のような状況から、井戸内では井戸の廃絶にあたり丁寧な祭祀が行われたと考えられる。また祭祀の時期は、出土した須恵器の型式から、５世紀末と推定される。

装飾付須恵器が井戸廃絶の祭祀に用いられた事例は、県下では認められず、全国的にもきわめて希有な事例と思われる。また装飾付須恵器の形態は壷の肩部に５点の子壷を飾るものであるが、この子壷の体部間に棒状の粘土を貼り付けて繋ぐという、他に例を見ないものである。

【中世の遺構】

掘立柱建物跡は、直径 40ｃｍ程の円形・楕円形の柱穴から成る。柱間は梁行２間以上、桁行３間の建物であったと推測される。建物の軸線は、ほぼ正方位を向いている。

３　まとめ

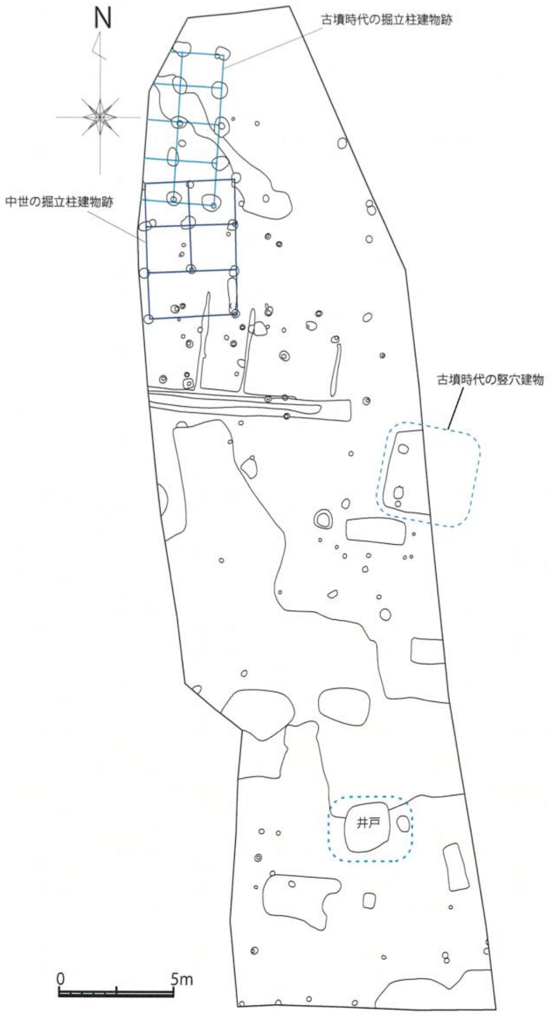
今回の調査では、古墳時代および中世の遺構群が検出された。遺構密度は調査区北半で高く、遺跡の中心部は調査区北部から北側へ広がる可能性がある。

古墳時代の井戸については、出土した遺物に韓式系土器が含まれること、きわめて特異な形態の装飾付須恵器を出土したこと、この装飾付須恵器を井戸廃絶時の祭祀に用いていることが明らかとなり、本遺跡が所在する中播磨から西播磨地域の古墳時代史に、特筆すべき事例として記載される成果を挙げることができた。井戸北側の掘立柱建物と竪穴建物についても、ほぼ同時期の遺物が出土しており、前田遺跡周辺一帯が５世紀末の古墳時代の集落遺跡が広がっている可能性が高いと判断される。

中世の建物跡については、南側に位置する前田遺跡Ｂ区（遺跡調査番号：2016150）で検出された掘立柱建物群と同じ方向を向いて建てられており、同一の方向意識のもと建物が建てられたとみられる。南側から今回の調査区にかけて、中世の集落遺跡が広がっていることがわかった。

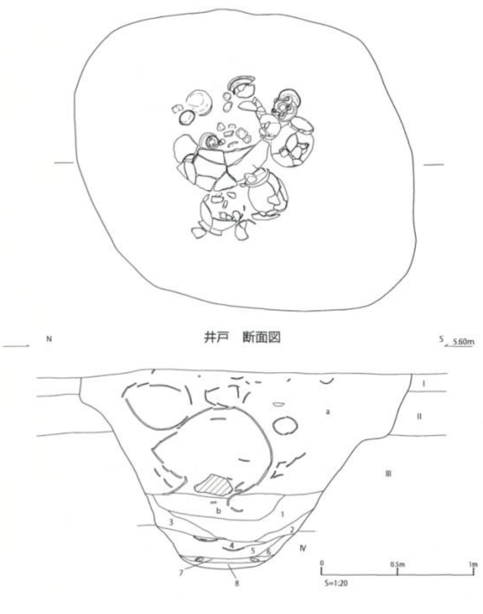
調査区全景（南から）

掘立柱建物跡（南から）



前田遺跡遺構平面図

前田遺跡空中写真



SE105 出土装飾付須恵器

SE105 平面・断面図

竪穴建物跡（SH82）内の遺物出土状況

調査区南端部の遺構群（北西から）

井戸（SE105）の遺物出土状況（第１面）

井戸（SE105）の遺物出土状況（第２面）

井戸（SE105）の遺物出土状況（第２面）

井戸（SE105）の遺物出土状況（第４面）

井戸（SE105）の遺物出土状況（第５面）

井戸（SE105）の遺物出土状況（最下面）